

ルソーの「想像力」と『エミール』

佐々井 利 夫

はじめに

ルソーは『告白』のなかで、「どんな境遇をも自分の空想で飾るほど豊かな想像力、いわば思いのままに、この境遇からあの境遇へと移れるほど強い想像力をもっていたので、私はどんな境遇にいても、ほとんど問題はなかった」(Conf., I, p.43)¹⁾と強調している。こうしたルソー特有の想像力*imagination*が、困難を極めた彼の境遇の救いでもあったし、また妄想の源でもあったことを、彼の自伝的著作の読者は容易に理解することができるであろう。

ルソーは想像力をその人生の比較的早い時期に身につけ駆使した。彼は『告白』の最初のほうで「5, 6歳までに何をしたかは知らない。どうやって読み方を学んだかも知らない。ただはじめの頃の読書と、それが私に及ぼした効果だけは知っている。この時期から自意識が始まり、それが絶えたことはない。私の母は小説類を残してくれた」(Ibid., p.8)と述べている。J.スタロバンスキーはこの部分を引用して「自我との出会いは想像力との出会いと一致している」²⁾と指摘する。この見解に従えば、ルソーは5, 6歳にして早くも想像力を身につけた。そして「人生について奇妙で小説的なromanesques観念」にとらわれ、「経験も反省もけっしてそれを直すことはできなかった」のである。(Ibid.)

このように、幼少期からルソーの人生の支えでもあったともいえる「想像力」についてその教育論ではどのように論じられているか、自伝的作品への言及をまじえて特に『エミール』第四編を中心に考察していきたい。

1. 自伝的作品にみる「想像力」

ルソーの豊かで強い想像力は逆境のときにこそ、活発になるとされる。『孤独な散歩者の夢想』(以下『夢想』と略す)では、想像力の助けを借りれば、どこにいても一たとえ「バスチーユ牢獄や、眼にとまるものなどなにもない地下牢のなかでさえ」—夢想に耽ることができる、と書かれている。(Rêv., I, p.1048) この箇所は、モチエを追われてサン＝ピエール島に逃れたときの夢想体験に関連して述べたものである。言い方を変えれば、ルソーにおいては内面的世界が平穏であるときには想像力はあまり働かないのである。たとえば、彼は『告白』で、「私の想像力が気持よく働くのは、私の境遇がもっとも不愉快なときだけであり、反対になにもかもが私の周りで微笑んでいるときには、想像力はおよそ微笑むことはない」(Conf., I, p.171)と述べている。この文章は、ヴァランス夫人に再会するために、リヨンからシャンベリへ向かって「心地よい未来しか眼に映らない」、満足した気分で旅したときのものであるが、「快い夢想は少しもなかった」(Ibid., p.172)と言葉を続けている。こうした言い回しから、ルソーの「快い夢想」は、「境遇がもっとも不

愉快なとき」に想像力を媒介にして生まれる、と解釈される。

作品の中でも登場人物に自身のそのような傾向を語らせている。たとえばルソーは『新エロイズ』のなかで、クラランという共同体のまさに集団的幸福の象徴として君臨する女主人公ジュリに次のように言わせている。「ここでは世界は私のためにあります。(中略)私の本質は、私をとりかこむすべての人々のなかにあり、私を離れたものは何もないのです。もはや私の想像力を働かせるようなものは何もなく、欲しいものもないのです。私は自分が愛するもののなかで生き、幸福と人生に充足しています。」(N.H.,II, p.689) すべてを享受しすべてが満たされているときに想像力は働かない、というルソーの考え方がここにも示されている。このように、ルソーの想像力は、多くの場合境遇から生じる内面にある不安の意識や孤独であることの実感を背景にして生まれ、彼を夢想の世界に誘うのである。

ルソーにおいて想像力が働くときの外的世界はどうであろうか。上述したように、「バスチーユ牢獄や、眼にとまるものなどなにもない地下牢のなかでさえ」夢想にふけることのできる彼には、外的世界は想像力を働かす条件としては主要なものではないように思われる。しかし、『告白』や『夢想』においてルソー自身が心地よく回想する夢想場面には、夢想が生起する特徴的な外的世界が描写されている。

たとえば『告白』では、ヴァランス夫人との日々、次のように回想している。「ある大祭日に、彼女が晩祷に行っているとき、私は彼女の面影と、そのそばで生涯を過ごしたいという望みで胸がいっぱいになって、町の外に散歩に行った。(中略)私の夢想にはある悲哀がただよっていたが、といっても少しも暗いものではなく、楽しい希望がそれらを和らげてくれるのであった。いつも不思議に心を動かされる鐘の音、鳥のさえずり、美しい日ざし、穏やかな風景、頭のなかで二人一緒に生活の場所と考えていた点在する田舎の家々、それらすべてのものは、生き生きとした、優しい、悲しい、そしてほろりとするような印象でもって心を打ったので、私はこの幸福な時間、この幸福な生活のなかにあって、夢中の恍惚のなかにいるような自分をみたのである。」(Conf.,I,pp.122-3) 内面の憂いと散歩、そして「鐘の音、鳥のさえずり、美しい日ざし、穏やかな風景」や「点在する田舎の家々」など、ここにはルソーにおける夢想の重要な構成要素がすべて描写されている。

また『夢想』では、よく知られているサン=ピエール島滞在時の一場面、「鐘の音、鳥のさえずり」にかわって波の音や水のざわめきが夢想のリズムを刻み深まりに誘っていく。「夕方近くになると、私は島の高みから降りて、好んで湖の岸辺に行き、どこか人目につかない砂浜の場所に腰を下ろした。そこにいと、波の音と水のざわめきに、五官はひきつけられ、魂は他のいっさいのざわめきを追い払われて、快い夢に浸りきり、知らないうちに夜のとばりにつまれていて、驚くこともしばしばであった。寄せては返す波の動き、とぎれなく続きながら感覚をおいて高まる音、それは休みなく耳目を打つうちに、私の内部で夢想が消した心の動きにとってかわり、これだけでもう私には、別に苦勞して考えたりしないでも、自分の存在がうれしく感じとれるようになっていくのであった。」(Rêv.,I,p.1045)

上述の例にあるように、ルソーの夢想を誘発する要素としての外的世界は、名状しがたい自身の暗い内面世界と好対照をなしているといえるであろう。内面が憂いに閉ざされ

ば閉ざされるほど、風景は夢想にふさわしくルソーに迫る。内面と外的世界を媒介するのは想像力である。彼の場合、視覚的聴覚的風景がそこにあるだけでは、不十分である。風景を解釈する想像力が必要である。すなわち、風景の美しさや物音の心地よさは、その場にいる者の想像力の媒介を必要とする。その媒介がなければ感動は生まれない。「われわれに印象を与えるものにたいして想像力が魅力を付け加えないならば、そこで得られる不毛な快楽は器官に限定されたものとなり、常に心を冷徹なままにする。」(Em., IV, p.418)

ルソーは内面の御しがたい情念に苦しみながら、周りを見渡す。想像力が活動を始める。その時はじめて諸事物が内面に一定の意味をもって浸透し始めるのである。ルソーのこのような局面について、J.=L.ルセルクルは次のようにいう。「風景が彼の感官に働きかけるとすれば、それはもっぱら心をつき動かしている時なのである。そういう時には、観客と舞台との間の相互作用のようなものが生まれている。そして想像力こそが、ひとつの風景の中で諸事物を有機的に構成し、魂との微妙な調和のなかでそれらに一定の意味を与えるのである。」³⁾ ルセルクルの指摘にみられるように、ルソーの夢想において想像力は内面と外的世界を媒介する重要な要素となっている。

不幸な境遇を過ごした(と自覚する)ルソーの支えでもあった想像力は、その教育論ではどのように論じられているか、以下に検討していきたい。

2. 「潜在的諸能力」としての「想像力」

五編で構成される『エミール』の展開は、大体15歳頃までの教育を主題とした第一編から第三編までと、16歳以上の青年期の教育を主題とする第四編第五編に大きく二分される。「自然人を知らなければならない」として設定された架空の少年エミールは、その少年期までにおいては、理性、良心が未発達であるために感覺的物理的世界に閉じ込められ(Ibid., pp.316-317)、それらの働きを要求する教育がしりぞけられて「消極的教育」が強調される(Ibid., p.323)。しかし第四編以降になると逆の方法が強調される。「成人を導いていくには子どもを導くためにしてきたことのすべてのことの反対をしなければならない」(Ibid., p.641)とされる。こうして、理性、良心に直接訴える教育が、宗教、歴史、地理、政治、社会そして恋愛といったものを通じて開始されていく。すなわち、子ども時代に否定された「積極的教育」(cf., Lettre à C. de Beaumont, IV, p.945)の展開がようやく始まるのである。

『エミール』のこうした論点からも理解されるように、「消極的教育」の時期は、想像力の発達を抑制するように教育される。「想像力の誤謬こそ、あらゆる有限の存在の情念を悪徳に変える」(Ibid., p.501)からである。「消極的教育」という方法論によって「物理的存在un être physique」(Ibid., p.458)として育つ少年エミールの想像力についての教師の示す配慮は、細心を極めたものとなる。

たとえば『エミール』のなかで、教師がエミールに地理学を教えようとして、早朝、散歩に出る場面がある。「草木の緑は、夜のうちに新しい力をとりもどし、生まれでる日に照らされ、最初の光線に金色に染められて、露のきらきら光る網におおわれ、眼に光と色を反射してくる。合唱隊の小鳥たちが集まって、声をそろえて生命の父にあいさつする。」

(Ibid., p.431) こうした情景においては、『新エロイズ』、『告白』、『夢想』といった作品であれば、主人公はほとんど夢想状態であるだろう。また現実の生活であれば、その場に居合わせる者は感動を共有することになる。その場に子どもがいれば、大人は風景から得られる感激や興奮を彼に伝えたいと思うであろう。しかし、ルソーによれば、そうした子どもとの感動との共有や伝達はできないし、それは「全く愚かなこと」とされる。そして言葉が続ける。「自然の風景の生命は、人間の心のなかにある。この風景をみるためには、それを感じなければならない。さまざまな対象は子どもの眼に見えるが、それらを結びつける関係は子どもにはみえないし、それらの合奏の甘美な和音は子どもには聞きとれない。こうしたすべてのものを一度に感じることから生まれる複合的な印象を感じるためには、子どもがまだ獲得していない経験が必要だし、子どもがまだ感じたことのない感情が必要なのである。」「この一日を満たすであろう歓喜を想像が彼に描きだしてくれなければ、どうして歓喜につつまれることができようか。」(Ibid.)

このように、教師はエミールを何らかの教育的意図をもって感動的な景色の場に連れて行くとしても、自分が得た感動を想像力の未発達な生徒に伝えてはならないのである。『エミール』のこの部分に示されるように、その教育論においてルソーは想像力の形成に慎重に注意を払うのである。

『エミール』のなかでは想像力についての考察はまず幸福論のなかで展開される。

ルソーによれば、人間の不幸への契機は「潜在的諸能力 les faculté virtuelles」(Ibid., p.304)の活動如何による、とされる。すなわち、自然は本来自己保存に必要な欲望とそれを満たすに十分な能力だけを人間に与え、ほかの能力はすべて「必要に応じて発達すべく人間の魂の奥底に貯蔵されたもの」とされる。この本源的状态においては力と欲望が均衡しているので人間は不幸ではない。しかし「潜在的諸能力」が活動を開始すると「想像力」が芽ばえ、ほかの能力に先行する。「想像力」の発達は人間の可能性の限界を広げるが、しかし一方において欲望の増大を招くことになる。こうして力と欲望の均衡が破れ、幸福は人間から遠ざかることになる (Ibid., p. 204)。そしてルソーは、動物と比較すれば人間は余分な能力をもっているのだが、「この余分なものce superfluが人間を惨めにする道具になっているのは不思議なことではないか」(Ibid., p.305)と慨嘆する。このようにルソーの論点をたどってくると、「貯蔵されたもの」「余分なもの」としての「潜在的諸能力」をいかに発達させていくかが、当然その教育論の重要課題となってくるのである。

ここで述べられている「潜在的諸能力」は、『人間不平等起源論』(以下、『不平等論』とする)において「自然人」に賦与されている「自己完成能力 la faculté de se perfectionner」あるいは「完成可能性 la perfectibilité」(Inég.III, p.142)に類推されるであろう。これは、人間を動物から区別する性質として「自由の意識」とともに指摘されているが、とりわけ「自己完成能力」はそうした区別を異議ありえないようにする人間特有の性質として強調される。しかしルソーはこうした能力こそが人間を静から動へ、明から暗へ、善から悪へ導いていった要因だったと強調する。「この特有でほとんど無制限の能力が人間のすべての不幸の源泉であり、平穏で無垢な日々が流れていたであろうこの最初の状態から時の力によって人間を引っ張り出すのもこの能力であり、人間の知識と誤謬、悪徳と美德を何世紀もかけて発現させ、結局は人間を自分と自然の圧制者にするのもこの

能力である。」(Ibid.)このような種としての人間の「自己完成能力」を媒介しての不幸への道程は、個としての人間すなわち少年エミールの幸福への道程の教訓でなければならない。何故なら、そうした能力は「われわれ人間にあっては種のなかにも個体のなかにも存在している」(Ibid.)からである。

『不平等論』でいう「自己完成能力」は、「環境の助けを借りて次々とあらゆるべつの能力を発達させ」(Ibid.)、そして、「自然人が潜在的に受容した『完成可能性』や社会的な徳やそのほかの能力は、それ自体では決して発達することはできなかった」のであり、したがって発達するためには、「それなしでは永遠に最初の構造にとどまっていたであろうような、多くの外的な原因の偶然の一致が必要であった」(Ibid., p.162.)のである。

かつて、ルソーを理性の限界を自覚した合理主義者として位置づけ、その後のルソー研究に多大の影響を与えたR.ドゥラテは上述の部分をとらえて、「潜在的諸能力」としての社交性や理性の発達を単純な「自然の偶発事件」から説明できるであろうか、と疑問を投げかけている。ドゥラテはこうして、「自然状態」から「社会状態」への移行、あるいは純粋に本能的な生活から合理的な生活への移行は「ルソーの体系のなかで最も弱い部分」である、と指摘する⁴⁾。

『不平等論』における人間の種としての上述した移行(発達)の問題は『エミール』においては思春期の教育の問題として論じられる。そしてルソーは、発達段階における子ども(自然人)から大人(社会人)へ移行するこの思春期の教育をこそ、最重視したのである。たとえば彼は、成長したエミールがやがては生涯の伴侶となるべき女性ソフィに出会う場面を長々と描写した箇所、人生のその時期を「教育全体のなかで最も重要で最も困難な時期」とし、そういう「子ども期から大人の状態への移行に伴う危険」については何も語られていないと述べ、そして、もし『エミール』という書物が有益なものたりえるとすれば、それはほかの人々が忘れてこの重要な時期を力説したことにある、と自賛する。(Em., IV, p.777) この子どもから大人への移行期に関するルソーの考察は『エミール』全体のほぼ三分の二を占め、その関心の所在、深さを測る、必ずしも本質的ではないにせよ、ルソーがその時期を重視する一つの論拠を提供しているといえるであろう。

3. 思春期の教育と「想像力」

思春期の教育を論じた『エミール』第四編の最初の部分に、高校の教科書「現代社会」にも引用され、よく知られている「私たちは、いわば二度生まれる。一度目は存在するために、二度目は生きるために。一度目は人間に生まれ、二度目は男性か女性に生まれる」(Ibid., p.489)という一文がある。性の目覚めのこの時期の教育について、ルソーは想像力をどのように導いていくかを重視する。なぜなら、「想像力によってのみ官能は目覚めるから」(Ibid., p.662)である。ルソーは想像力の導き方についてこの時期においてもなお「消極的」な方法を用いることを強調する。すなわち想像力を抑制することを説くのである。「危機の年齢が近づいたら、若者たちには彼らを刺激する光景ではなく、彼らを抑制する光景を見せなさい。官能を燃えあがらすのではなくその活動を抑えるような対象によって、生まれつつある想像力をだましなさい。」(Ibid., p.517) 具体的には、「大都会から

彼らを遠ざけること」(Ibid.),「つらい仕事で彼の体を鍛えることで、彼をひきずっていく想像力の活動を押し止める」(Ibid.,p.644)などが提案されている。

とはいえ、情念の葛藤に苦しむこの時期に「消極的」な方法だけでは対応できないであろう。以下において二つの方法について検討したい。

一つは非言語的要素の強調である。すなわち、ルソーは想像力の制御を言葉それ自体によって理性に直接働きかける方法ではなく、徴候言語*la langue des signes*による働きかけを強調する。「私たちの時代の誤謬の一つは、あたかも人間が精神でしかないように理性をあまりにも生のまま用いることである。想像力に働きかける徴候言語をなおざりにすることによって、人は言語のうちもっとも強力なものを失ってしまったのだ。」(Ibid.,645)たとえば、エミールの教師が愛、女性、快楽などについてその生徒に語る場面がある。かれは周到な準備をしたうえで次のように言う。「私はまず彼の想像力を揺り動かそう。私が与えたいと思う印象にもっとも有利な時と所と対象を選ぼう。(中略)私たちのいる場所、私たちを取り巻いている岩、森、山を彼の約束と私の約束の記念碑としよう。私の眼、私の語調、私の身振りに私が彼に吹き込みたいと思う熱狂と熱意とをこめよう。そこで私は語り、彼は私に耳を傾け、私は感動し、彼は心を動かされるであろう。」(Ibid.,p.648)

言葉それ自体による理性への働きかけよりも徴候言語を重視する方法は、サヴォア助任司祭が若者に信仰告白をする場面にも示されている。「丘の麓をポー河がよぎり、その流れが地味ゆたかな兩岸を洗っているのが見はるかせた。遠方には、アルプスの巨大な山なみが全景の王冠をなしていた。さしのぼる日の光はすでに平野にさしそめ、木々の、小丘の、家々の長い影を野に投げかけ、光のさまざまな明暗で、人間の眼にふれうるもっとも美しい風景をゆたかにしていた。あたかも自然がその壮麗さのすべてを私たちの眼前にくりひろげて、私たちの会話に主題を提供するかのようであった。」(Ibid., p.568)この場面、スタロバンスキーは次のように言う。「まず風景が語っているのだ。安らかな心の人の言葉は、彼の話に先立つ無言の観想のうちにすでに示されていること以外は何も明らかにしないであろう。」⁵⁾このようにルソーは性や宗教について思春期の若者に説く方法として、非言語的要素を重視するのである。

もう一つの方法は、想像力をもっと積極的に利用し、想像のなかで理想の愛を見出すことで現実の情念を制御するということである。

この方法は、ルソーの体験にも由来するものである。本稿の冒頭で示したように、『告白』によれば幼少期からの読書体験のなかでルソーは、『エミール』の論点とは逆に人生の早い時期から想像力によって窮地を救われてきたといえるであろう。たとえば、自身の多感な思春期を振り返ってルソーは、「狂おしい気持ち」をどう克服したかを回想している。「不安な想像力の一つの方策を決め、それで私を救い目覚めたばかりの肉感を鎮めた。それは、自分の読書のなかで興味を持ったさまざまな境遇を心の糧とし、それらを思い出し、変化させ、組み合わせ、自分に当てはめるのだった。そんなわけで、私は、自分が想像する人物の一人となり、自分の趣味に従ってもっと好ましい地位に身をおき、ついには架空の境遇に身をおくことによって、不満な現実の地位を忘れたのである。」(Conf.,I,p.41)ルソーの「小説的な」この方法は、エルミタージュにおける生活でもなお継続される。恋への情熱を失いたくない彼はまたも「小説的な」世界に身をおくのである。「現実の女性

には手が出ないので、私は空想の世界に身を投じた。そして自分が夢中になるにふさわしい女性が少しも見当たらないので、それを理想の世界ではぐくみ、想像力に富む私の空想は、たちまちその世界を私の心に合った女性たちで満たしたのだった。」(Ibid.,p.427)

ルソー自身がその境遇のさまざまなときに採用したこの「小説的な」方法が、教育論の思春期から青年期を想定しての時期、女性との交際において身を守る術として強調される。すなわち教師は、エミールに彼にふさわしい理想の女性を描写する。「私が彼に描く対象が想像上のものであってもかまわない。それが、彼を誘惑するかもしれないものに嫌悪感をもたせられれば十分なのだ。彼がどこに行こうとこれと比較して、彼の心をとらえる現実の対象よりもこの幻影のほうを好むようにさせられれば十分なのであって、真の恋愛そのものも幻影、虚構、錯覚以外の何であろうか。人は、自分が作った心象のほうを、これを当てはめる対象よりもずっとよく愛する。」(Em.,IV,p.657) 想像のなかで理想の女性のモデルを描く、そうすれば「現実の対象がある場合に劣らずこのモデルに類似したすべてのものへの愛着を彼に感じさせ、類似しないすべてのものへの反感を彼に抱かせるであろう。」(Ibid.,p.657) こうして『エミール』は第五編にエミールの伴侶となるソフィを登場させ、『新エロイズ』を思わせるような「小説的な」展開になっていくのである。

おわりに

ルソーは、その困難な境遇において想像力を媒介に夢想のなかに自分の居場所を見出すことを繰り返した。年月とともに幼少期からの「小説的な」性格はより深められたであろう。こうした事情はその教育論における「想像力」への言及にも影響を与えたはずである。本稿においては『エミール』第四編にその影響の一部を見ることができた。

『告白』には、「この深い心地よい孤独のなかにあり、森と水のなかであらゆる種類の鳥の合奏とオレンジの花の香りとともに、私は絶えざる恍惚のうちに『エミール』第5巻を書いた。その十分に新鮮な彩りは大部分、私が書いた場所の生き生きとした印象のおかげである」(Conf.I,p.521)、とある。ここには前項において考察した、徴候les signesの直接的な働きかけをうけつつ、想像上の若い男女(エミールとソフィ)の出会いから結婚にいたる幸福な過程を夢想する著者自身が回想されている。著者自身が、『エミール』第四編における被教育者の立場に身をおいていたといえるであろう。

注

- 1) 本稿に引用したルソーの著作は、ブレイヤード版J.-J.Rousseau Oeuvres complètesを参照した。なお、タイトルを以下のように略記し、そのあとにブレイヤード版の巻数を指示した。

Inég., Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité

N.H., La nouvelle Héloïse

A Malesherbes, Quatre lettres à M. le Président de Malesherbes

Em., Emile

Conf., Les confessions

Rêv., Les rêveries du promeneur solitaire

なお、訳は白水社版『ルソー全集』を参照し、一部修正を加えた。

- 2) J. スタロバンスキー著 山路昭訳 『透明と障害』 みすず書房 1973 p.10
- 3) J.=L. ルセルクル著 小林浩訳 『ルソーの世界』法政大学出版 1993 p.28
- 4) R. Derathé, "Le rationalisme de J.-J. Rousseau", 1948. pp.19-20
- 5) J. スタロバンスキー著 前掲書 p.235